

令和 3 年 5 月 21 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12198

研究課題名（和文）初期仏教における十二支縁起説成立史研究の再構築

研究課題名（英文）Rethinking the formation of the twelve links of dependent origination

研究代表者

名和 隆乾（Nawa, Ryuken）

大阪大学・文学研究科・講師

研究者番号：20782741

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：従来、インド初期仏典中には、三世に亘る十二支縁起説は確認されないというのが定説であった。これに反して本研究は、それに該当する十二支縁起説が、『分別経』（『相応部』12.2）中に確認されることを指摘した。この十二支縁起説では「識」「触」「受」「愛」の4支のみが、例えば「六識身」の様に「六X身」と表現される。本研究はその理由をも明らかにした。すなわち、六内処に単数形、六外処に複数形を用いる「六処」に始まり、「識」「触」「受」「愛」の生成を説き、「識」以降の4支を「六X身」と表現する縁起説を継承している為である。「身」の語により、六外処の複数性が示されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

十二支縁起説は、仏教教理の中核を占める故に従来より様々に論じられてきた。しかしその殆どは根拠が曖昧で、極端に言えば個々人の信仰表明の域を出るものではなかった。これに対して本研究は、全て文献中に確認される事実に基づき、インド初期仏教段階から同教説が2度の生まれ変わりを含んでいたことを主張し、縁起説成立史研究を学術的に一歩前進させた点に意義がある。また本研究は、種々のデジタル技術を駆使して三蔵中の用例を隈なく収集し、かつ最新の印欧語研究の知識を取り入れて正確に読解するといった、これまでになかった学術的な縁起説研究の方法論を提案する意義をも持つ。

研究成果の概要（英文）：So far, researchers on early Indian Buddhism claim that they cannot detect the twelve-links dependent origination teaching in the Buddhist canon which contains rebirth twice. Contrary to such claims, I pointed out that the Vibhanga sutta (Samyuttanikaya 12.2) has that. In the teaching of the sutta, only the four angas (vinnana, phassa, vedana, and tanha) are described as “cha- X-kaya-” (for example, “cha- vinnana-kaya-”). The reason why such specific description is used for the four angas is because the teaching in the Vibhanga sutta takes over the dependent origination teaching which tells the above four angas are originated from salayatana. In this teaching which begins with salayatana, the six faculties (cha- indriya-) are described with singular form, but the six objects of the faculties are with plural form. The description “cha- X- kaya-” expresses the plurality of the objects of the four angas by the term “kaya-.”

研究分野：インド学・仏教学

キーワード：初期仏教 縁起説 輪廻

1. 研究開始当初の背景

インド初期仏典において、種々の原因の連鎖の結果、苦が生成することを説く縁起説には、連鎖する原因(支)の数の異なる様々な用例が存在し、最大で十二支を数える。そして後代の仏典では、十二支縁起説が典型として取り上げられることになる。この十二支縁起説縁起説のインド初期仏典における成立史研究は、基本的に、20世紀初頭の宇井伯寿や和辻哲郎による以下の2つの提言を前提として行われてきた：縁起説は輪廻思想を含まない、種々の縁起説の支数の多寡は思想的完成度を反映する。これら2つの提言はその後、木村泰賢を始めとする様々な批判の結果、近年はその信憑性を失いつつある。例えば榎本文雄(「輪廻思想と初期仏教」『インド世界への憧れ』, 2008)は、上記に反して縁起説が輪廻を含むことを総合的観点から指摘し、馬場紀寿(「初期仏典と実践」『仏典からみた仏教世界』, 2010)は、に反して十二支に満たない種々の縁起説は、それぞれの趣旨を有するヴァリエーションではないかと提言している。この様にして従来の前提は崩れつつあり、これに伴って縁起説成立史研究もほぼ白紙に戻った状態にある。しかしその後、新たな成果は現れていない。

2. 研究の目的

本研究の主目的は次の2点にまとめられる。第一に、「分別経」(『サンユッタ・ニカーヤ』第12章第2経)に含まれる十二支縁起説成立史の一側面を、従来の反省を踏まえた研究手法を用いて解明すること；第二に、本研究で新たに用いる研究手法を一般化して提案することにより、縁起説成立史研究を再出発させることである。

3. 研究の方法

先に少し触れた「分別経」とは、十二支縁起説を成す12項目(支)の定義を述べる経で、後代に種々の仏典に引用されることになる重要なものである。この「分別経」中の十二支縁起説では、「識」「触」「受」「愛」という4支の定義においてのみ、例えば cha- viññāṇakāya-の様に、kāya- (「集まり」。漢訳語「身」)が付される。またこの4支は、次の因果関係にある(玄奘訳で示す。囲み字は「カーヤ」が用いられる項目、「A B」は「AからBが生じる」の意):「**識** 名色 **六処** **觸** **受** **愛**」。

一方、種々の縁起説のうち、六処で始まる縁起説(六処縁起説)では、先と同じ4支にやはり「カーヤ」が付される:「六処 **識** **觸** **受** **愛**」。先の十二支縁起説との相違は、識が六処より後に来る点である(名色が含まれないが、六処に内包されている)。

以上の事実について、本研究は「カーヤ」の語に着目し、下記2点の問題を設定する。(ア)「分別経」の十二支縁起説中、4支にのみ「カーヤ」が使用されるのは何故か。(イ)五支縁起説で同じ4支に「カーヤ」が使用され、識と六処の位置が逆転しているのは何故か。これら2つの問題の解決により、本研究の目的は達成されることになる。

この問題設定において調査すべきは、「カーヤ」の用法と、五支縁起説に見られる文法的特徴である。

4. 研究成果

以下、まず先に結論を述べ、次いで結論に至るまでの調査の概要を述べる。

4.(1) 結論

まず結論として、「分別経」において、上記4支のみが cha- viññāṇakāya-の様に cha- Xkāya- (Xには4支が入る)と表現される理由は、本経に説かれる十二支縁起説が、六処で始まり、識を始めとする4支の生成を説き、かつその4支を cha- Xkāya-で表現する特定の六処縁起説を継承している為である。この六処縁起説は、例えば cakkhuvīññāṇa-の生成を説く際、根である cakkhu-は単数形、境である rūpa-は複数形で表され、この2つを原因として、cakkhuvīññāṇa- (単数形)が生成することを説く。そして、この cakkhuvīññāṇa-が viññāṇakāya-と言い換えられる。この様に換言される理由は、cakkhuvīññāṇa- (単数形)が、複数の境に由来する集合的なもの(kāya-)であることを表す為と考えられる。

この時、「分別経」の十二支縁起説と上記の六処縁起説とでは、識と、名色または六処との位置が入れ替わっている。その理由は、六処縁起説が、六処から如何に識以下の縁起支が生成する

かが説かれているのに対して、十二支縁起説の方は、無明 諸行の後、前世から来世へと識が相續されることで輪廻することを表す為に、識の位置が入れ替わっていると考えられる。つまり「分別経」に説かれる十二支縁起説は、識と生という2支において2度の生まれ変わりを含む、三世に亘る縁起説ということになる。

4.(2) 調査の概要

「分別経」の十二支縁起説において、識、触、受、愛という4支のみが cha- Xkāya- という表現で表される理由を明らかにすべく、以下の調査を行った。

4.(2) パーリ三蔵において、4支、乃至、そのいずれかが Xkāya- で表される全用例の調査

まず、パーリ三蔵において、4支全て、乃至、そのいずれかが Xkāya- で表される用例を全て収集した。これは合計で15例を数える。その全例において、4支が Xkāya- と表現される際には、常に cha- が冠されることが明らかになった。

4.(2) パーリ三蔵における kāya- 後肢複合語の調査

パーリ三蔵より、kāya- を複合語の後肢に有する複合語を調査した。すなわち、CPD が提示する全170種の kāya- 後肢複合語の全用例を集め、その用法や註釈による解説をまとめた。その結果、この170種の複合語のうち、数字を冠して用いられるのが、cha- Xkāya- で表される4支のみであることが分かった。

また、4支以外の kāya- 後肢複合語のある例の中には、註釈が、「Xkāya- という表現が、多数存在する X を集合的に捉えた表現と解説する箇所や、Xkāya- = X の関係が成り立つ場合があることを解説する箇所のあることが分かった。

4.(2) パーリ三蔵において、Xkāya- という表現が用いられる他の教理用語

パーリ三蔵において、Xkāya- という表現が用いられる他の教理用語を調査すべく、仏教教理をいわゆる法数でまとめる「Saṅgīti 経」と、その諸パラレル(まとめて「Saṅgīti 経類」と称する)の調査を行った。その結果、諸部派の伝承する Saṅgīti 経類において Xkāya- という表現が用いられるのが、上記4支が cha- Xkāya- と表現される場合のみであることが分かった。

また同経では、例えば *tisso taṇhā*, *tisso vedanā* の様に、「数詞+4支のいずれか」という組み合わせの表現も見られるが、このような場合には Xkāya- という表現は用いられないことも分かった。

つまり、4支に対して Xkāya- という表現が用いられるのは、常に cha- が冠される場合のみということになる。この cha- は、明らかに六処に由来する。以上から、4支が cha- Xkāya- で表される背景には、六処に関わる教理が関わっていることが予想される。

4.(2) 六処縁起説における4支の生成過程について

4.(2) で調査した全15例のうち、六処と4支が関係し、かつ cha- Xkāya- という表現が用いられる教説として挙げられるのは、六処縁起説である。以下、この縁起説が現れる MN 148 該当箇所の原文・和訳を提示する。以下は、*cakkhuvīñṇaṇa*- の生成が述べられる箇所である。

MN 148 (III p. 281)

cha viñṇāṇakāyā veditabbā ti iti kho pan' etaṃ vuttaṃ. kiñ c' etaṃ paṭicca vuttaṃ. cakkhuñ ca paṭicca rūpe ca uppajjati cakkhuvīñṇaṇaṃ ...

「認識の6つの集まりが知られるべきである」という様に、一方でこのことが語られた。またこれは何によって語られているのか？眼(*cakkhuṃ*, sg.)と色形(*rūpe*, pl.)とによって、眼による認識(*cakkhuvīñṇaṇaṃ*, sg.)が生起する...

上記では、根である *cakkhu* (sg.) と、境である *rūpa-* (pl.) とを原因として、*cakkhuvīñṇaṇa-* (sg.) が生じることが示されている。全く同様の形式で、残りの五根、五境から五識が生じることが述べられる。この様にして生じる六識が、cha- *viñṇāṇakāya-* とまとめられている。これは言い換えれば、単数の根と複数の境から生じた単数の *viñṇaṇa-* が、*viñṇāṇakāya-* と呼ばれることになる。このことから、*viñṇāṇakāya-* という表現は、以上の仕方でも生成した *viñṇaṇa-* (単数形) が、複数の境に由来する「集合的なもの(*kāya-*)」であることを表していると考えられる。

MN 148 では、*viññāṇa*-以降、*phassa*-、*vedanā*、*taṇhā*-の生成も説かれ、それぞれ *cha*- *Xkāya*-という表現も用いられているが、その理由も *viññāṇa*-の場合と同様に解される。

ただし、パーリ三蔵中に存在する六処縁起説の全 16 例中、上記 MN 148 の六処縁起説のみが、六根（単数）と六境（複数）とによって六識（単数）が生起し、かつそれを *cha*- *viññāṇakāya*-と言い換える記述を有する。他の例では、六根（単数）と、六境（単数または複数）によって六識などが生成することが説かれるのみで、*cha*- *Xkāya*-という表現は用いられていない。

4.(2) パーリ註釈や後代の仏典中の *cha*- *Xkāya*-という表現についての解説

これには、報告者が直前に述べたのと同じ見解を提示するものと、異なる見解を提示するものがある。見解を同じくするものとして、*Paṭis-a* や『縁起経釈』『決定義経註』が挙げられる。一方、異なる見解として、例えば以下が挙げられている。

すなわち、*Ps-t* は、その趣意としては、「*vedanā*-は、過去、現在、未来という時間的区別によって様々である。これをまとめて示せば、『1つの感受の集まり（*eko vedanākāyo*）である』と述べている。これは、*kāya*-という語が付される理由を、過去、現在、未来に種々の *vedanā*-が存在する為と解するものである。しかし、この理由では、4支以外に *kāya*-の語が付されない理由が説明出来ない。

次に『婆沙論』は、「六愛身」の様に、「愛（*trṣṇā*-）」には「身」の語が付されるのに、「六瞋恚身」や「六無明身」といった表現が見られない理由について、「愛通三界、獨行遍六識故、説為身・瞋恚雖亦獨行遍六識、而不通三界・無明雖亦通三界、而非獨行遍六識故、不説為身」と述べている。これは要するに、「愛」の満たす条件を「瞋恚」や「無明」が満たしていないから「身」の語が付されないと解説するものである。しかし、この論理があらゆる仏教教理についても適用され得るのか疑問であるし、そもそもこの『婆沙論』の論理では、同文献が存在を認める一愛〜無量愛のうち、六の場合のみ「六愛身」の様に「身」が付される理由が説明出来ない。

この様に、報告者とは異なる *cha*- *Xkāya*-という表現についての解説は、*kāya*-という語が付される理由を十分に説明出来ているとは言い難い。

4.(3) まとめ

以上、本研究が期間中に様々な角度から行った調査に基づけば、*viññāṇa*-、*phassa*-、*vedanā*-、*taṇhā*-という4支にのみ *cha*- *Xkāya*-という表現が用いられる理由は、4.(2) で挙げた特定の六処縁起説に由来する、すなわち *viññāṇa*-などが、複数の境に由来する「集合的なもの（*kāya*-）」であることを、*viññāṇakāya*-といった表現で表していると結論づけられる。「分別経」中の十二支縁起説において、*viññāṇa*-の位置がこの六処縁起説と異なっている理由については、既に4.(1)で述べた所であるから、ここでは繰り返さない。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 名和隆乾	4. 巻 68
2. 論文標題 パーリ註釈文献における「子肉の喩」に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 1053-1058
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 名和隆乾
2. 発表標題 パーリ註釈文献における「子肉の喩」に関する一考察
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryuken Nawa
2. 発表標題 Some Remarks on mara.na- (“death”) in the Paali Canon
3. 学会等名 Preparatory Session for 11th INDAS International Symposium, October 26th, 2019. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ryuken Nawa
2. 発表標題 Attitudes toward Suicide in the Paali Canon
3. 学会等名 11th INDAS International Symposium (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 加治洋一・漢訳仏典研究会（編），中西麻衣子・名和隆乾・古川洋平・阿賀谷智宏（著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 自照社出版	5. 総ページ数 221
3. 書名 『義足経』研究の視点 附・『義足経』訓読	

1. 著者名 2.3. 加治洋一・漢訳仏典研究会（編）・中西麻衣子・名和隆乾・古川洋平・阿賀谷智宏（著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 自照社出版	5. 総ページ数 222
3. 書名 『義足経』研究の視点 附・『義足経』訓読	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>academia.edu https://osaka-u.academia.edu/RyukenNawa https://www.academia.edu/</p>

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------